



令和4年2月28日
令和3年度学校だより NO.53②
加古川市立平荘小学校

平之荘神社での立ち稽古

2月21日(月)に、6年生は、平之荘神社の清掃活動を終えた後、平之荘神社の舞台をお借りして立ち稽古を行いました。

今まで壁に囲まれ声が反響してくる多目的室で狂言の練習を行ってきた6年生にとって、平之荘神社の舞台でどこまで今までの練習が通用するかが気になるころでした。

実際、山口耕道先生も、石段のところで観客役になっている子どもたちに、「石段のところにいる人たち、ちゃんと聞いてあげてね。舞台から声のとどいているか。そして、お互いに教え合ってください。こうしたらいいと言ってあげてください。」と何度も何度も声をかけられました。

屋内での練習と屋外での練習は本当に違いました。風の音、風に揺れる木立の音、境内を歩く人の足音、そして、ささやく声等いろいろな音が混ざり合っている中での表現活動になります。演じている人は、観客にしっかりと言葉を届けないと舞台の上で演じている内容が観客に全く届きません。いわゆる“舞台の上で孤立してしまう”状況が起こります。

演じている人は、自分の発する言葉を精一杯観客に届ける努力をすることで、“舞台の上で孤立”を防ぐことができます。また、2～3人が組になって演じますが、お互いに相手の発する言葉を受けて、自分が観客に精一杯言葉を届けることで、自分のセリフだけでなく一緒に演じている人のセリフの内容まで届けることができます。狂言の学習を通して、仲間と共に演じる経験や達成感を子どもたちには味わってほしいと思います。

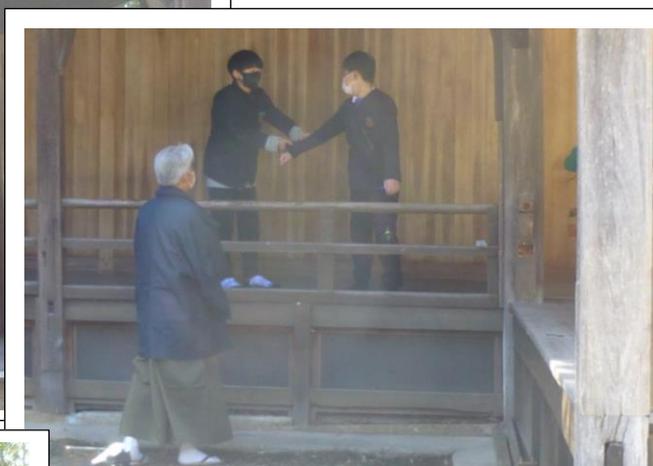
いつも山口耕道先生は、自分が演じることだけでなく、観客を意識した演技について、子どもたちにご指導くださっています。

『観客は、聞きたいと思って来てくれている。その思いに乗っかるように演じるといい。自信をもって周り(観客)を引き込むこと。伝えようと思ったことは、相手(観客)が聞いてくれる。そして、演じている人に反応を返してくれる。自分がやった分だけ、同じ分だけ観客から返してもらえる。それを体験してほしい。』と。

6年生のみなさん、平之荘神社の立ち稽古も残り1回となりました。観客を常に意識しながら演技ができるよう仲間と共に仕上げていきましょう。

2月21日の立ち稽古より

元気で、勢いがあってとてもいいですよ。



動き方がいいですよ。



『観客を巻き込む』『舞台の上での孤立を防ぐ』ポイント

- 言葉（セリフ）は、ゆったりと、そして、ゆっくりと言う（早口にならない）。
 - 間をとる。
 - 観客を意識する。意識するだけで、伝わり方が変わる。（観客に、声を届かすように話す）
 - ・どこ（誰）に対して伝えたいのかを頭の中で意識しながらセリフを言う。
- ⇒観客に伝えようと意識することで、舞台からの発信力が出てくる。
- 狂言は、日常会話とは違う。芝居をしている。会話のテンポを感じるようにする。
 - 演じている人の声を届け、聞いている人たち（観客）を巻き込む。観客を誘うようにする。

≪『附子』・・・“笑い”につながる表現の工夫≫

例えば

- 附子を食べた太郎冠者を滅茶苦茶心配し駆け寄る次郎冠者と「旨うてたまらん。」という太郎冠者の気持ちのギャップを動きで表現するところ。
- 太郎冠者と次郎冠者の附子の引き合いの場面を表現するところ。
- 附子を全部食べてしまった言い訳を考えやり取りをしているが、なかなか相手を信用していない太郎冠者と次郎冠者を表現するところ。
- 最後は、砂糖を『附子』（大の毒）と言って、太郎冠者と次郎冠者に食べさせまいとした主人に対して、砂糖を食べてしまった申し訳を上手に考えて主人に伝えたおもしろさを表現するところ。

「出し抜くまいぞ。」を上手く表現できています。

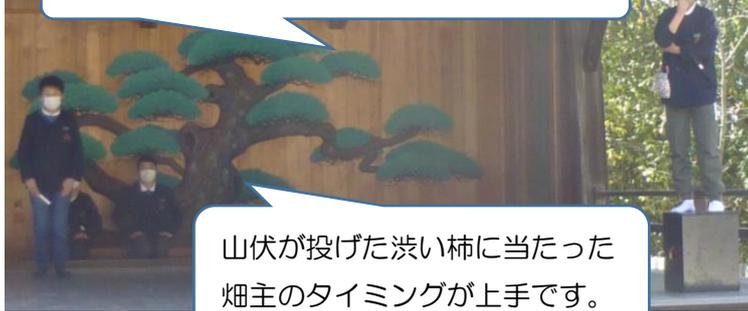


泣き方が上手になりました。



二人とも代役が見事に演じられています。素晴らしいです。

山伏と畑主の息がよく合った演じ方です。

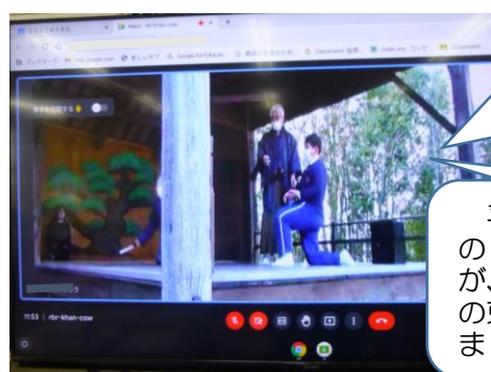


山伏が投げた渋い柿に当たった畑主のタイミングが上手です。



平之荘神社での狂言練習を学校の大型モニターへリモート配信してみました。（試し）

よく声が届いています。



平之荘神社での練習（山伏の「ぼーろんぼろん」）の音が、（リモートではなく）学校の東門の所まで、聞こえてきました。頑張っています。